

た、こうした「前衛」的文化と構造を共有している。だが、こうした教祖像もやはり、大衆消費社会におけるリアリティを喪失していくことになるだろう。それでは教祖研究のなかに、「内部」・日常性における対話を志向する方向性はないのだろうか。この点で示唆的なのは島蘭の教祖像で、テキストの「作者」へのノスタルジアは稀薄で教祖と信徒とのつながりを重視する作品となっている。島蘭は信仰当事者によって共有された伝承を用いながらも、解釈のレベルで信仰者への批判を行い、対話を目指そうとしているともいうことができ、ここに信仰者と非信仰者との間に呼びかけと応答の関係が生じる可能性を見出すこともできる。安易な日常化・制度化を拒む「前衛」型教祖像の批判力は依然として重要だが、信仰者との対話を通して教祖像のあり方を再考し続けていくことにこそ、思想としての教祖研究の現代的意義が認められるのではないだろうか。

稿本天理教教祖伝の成立

幡 鎌 一 弘

天理教教祖中山みきは、教義的に、親神天理王命の顕現である「月日のやしろ」、陽気ぐらしへの信仰的歩みの手本という意味での「ひながたの親」、そしていまなお存命で働いているという「存命の理」で説明される。天理教会本部の権威本として編纂された伝記が、『稿本天理教教祖伝』（以下『稿本』）

であり、約半世紀にわたって蒐集された史料・伝承などを素材として叙述された「教義書」である。一九五二年前半に草稿が作られてから、一九五六年に完成するまでに、章立て・叙述がかなり変化している。

そもそも『稿本』編纂当初は、文献史料に基づき政治史・宗教史と関係付けた歴史的理解と「おふでさき」の解釈による教義的理解との葛藤があり、そのなかで教義的理解が研ぎ澄まされ、教義を基にした神学的歴史叙述が行われるようになった。そのため、『稿本』では、政治・社会構造などとの関係は全く述べられず、事実の提示に終始する。代わって『稿本』第八章「親心」になるような教義説明や（第十一稿から）、『稿本』第五章に示されるような「つとめ」の意義など（第十四稿から）が新たに書き加えられ、強調された。歴史的理解の後景化は、「ひながた」の非歴史化・非政治化を図りながら普遍化するもので、かわって、「ひながた」の一貫した姿勢として、救済と救済の手段としての「つとめ」の完成が重視され、教祖の多様なエピソードを纏め上げる叙述の柱になった。文献学的手法もとられる一方で、教義的判断をもとに史料が選択されたり、あるいは一部を書き改めたりした。採用されなかった史料の多くは、『稿本天理教教祖伝逸話篇』へ振り向けられた。

史料が書き改められた例が、天保九（一九三八）年の啓示の言葉である。従来からも指摘されているように、『稿本』の特徴として、立教の前後で中山みきの人生を断絶させているが、立教を冒頭に配置する叙述は第八稿からで、史料に準じた表現から、史料をもとにしつつ教義によって構築された『天理教教

パネル

典』の啓示の言葉にそろえられた。

また、編纂の当初は、当時の『天理教教典』に準じて誕生からの九十年と立教からの五十年の二つの「ひながた」の見方があった。しかし、第五稿以後、「ひながた」の用例は後者に限定された。前者は「ひながた」ではなく、「万人の手本」と位置づけられたが、第十一稿からはこのような表現もとられなくなった。教祖の全人生を広く人々の手本としようと試みられていたものが、立教（信仰）を前提にして厳格に区別された。ただ、「ひながた」にはならなかった立教以前の教祖に対する評価には、近代日本の一般の価値基準に従っているとところが顕著だったことにも注意しておきたい。非歴史化は脱日本文化を自覚した結果ではないので、容易に日本に回帰してしまうのである。

「月日のやしろ」（教祖の神格化）と「ひながたの親」（人間化）の両者は、相反する要素を持つ。その矛盾の象徴が、宮池へ身を投げようとした逸話である。「月日のやしろ」を強調する立場からすれば、天理王命と中山みきの主体の分裂は回避しなかったと思われる。しかし、改稿を繰り返しながらも、二面性を統合的に叙述することは難しかった。中山正善も中山みきを人間的に理解する伝統的信仰に従ったことがあり、そこからの脱皮を図りつつも、分裂的な記述がわずかに残っていて、伝統的理解を完全に否定できなかった。

多くの場合、中山みきの教えや人生を一貫し完結したものとして把握する。しかし、「こふき」は未完であり、「かんろだい」「世界たすけ」の実現も同様で、「存命の理」は未完の宣言

である。未完で開かれていたがゆえに、後の人々がみきの救済の物語に参入できたのである。五十年の「ひながた」とみきの現前性（存在証明）の二つに支えられて明治二十年で終わる『稿本』の枠組みそのものが、中山みきの物語を狭めているのかもしれない。

教祖像の力学

——金光教の教祖探求から——

竹部 弘

「教祖伝の脱構築」というテーマの下、教祖伝に結果する教祖探求において、様々な動因や相異なる要因から成り立つ教祖像の力学を多面的に考察する。具体的には明治期から昭和期に至る金光教の教祖探求過程を、教団の公的表明と信仰者の内発的希求、根本資料の変遷（伝承資料から教祖による自伝的資料へ）、社会状況・時代精神や学問動向との関わり等、諸動因の相剋・競合・協働関係において検討する。

教祖金光大神在世中には、人々は眼前に接する教祖に充足しており、伝記的な希求は余りなされなかった。教祖没後も直接教祖に接した「直信（じきしん）」と呼ばれる人々は、体感的に把握した教えと記憶で生きていた。その後教団独立時（明治三三年）、教団が公的に表明していたのは「慎誠（しんかい）」「神訓（しんくん）」と呼ばれる教えであり、日柄方位の迷妄